

【実践報告】

教育実習Ⅱ（幼）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 白石 崇人

1 はじめに

幼稚園教諭一種免許状の取得を希望する学生を対象とした「教育実習Ⅱ」（3年前期開講）は、指定幼稚園において実習を行い、幼稚園教諭に必要な実践的知識・技能の基礎を身につけることを目標にした科目である。具体的には、次の9つの知識・態度の習得が目指される。

- ① 幼稚園教諭としての望ましい基本的態度
- ② 教職員との協力的態度
- ③ 幼児の発達理解に関する知識・技能
- ④ 幼児に対するかかわり方に関する知識・技能
- ⑤ 幼児集団に対するかかわり方に関する知識・技能
- ⑥ 保育内容に適した環境に関する知識・技能
- ⑦ 設定保育の計画に関する知識・技能
- ⑧ 幼児を保育するための基本的な指導力
- ⑨ 問題解決に向けた研究的態度

2 実施のスケジュール

項目	時期	主な内容
事前学習 (学内・指定園)	4～5月	(2月、履修予定者に概要・事前課題を説明) ・実習希望先の聴取結果などを踏まえて決定した実習先の通知 ・実習費等の事務手続きの説明 ・実習先への事前訪問、実習園事前オリエンテーション ・実習準備の個別支援（目標と課題、日誌、指導案など） ・実習前・中・後の心構え・諸注意 ・事後学修の日程・課題確認
実習期間 10日間 (指定園)	6月	・合計20日間の実習期間を設定し、学生を2グループに分けて、それぞれ10日間実習を行う。 ・実習の内容は実習園の計画による。共通する主な内容は、①観察・参加実習、②日誌作成・指導、③保育指導案の計画と設定保育（1回以上、事前指導・事後反省会含む）、④日常業務である。
事後学習 (学内)	7月	・各自実習を振り返り、教育実習記録をまとめる。 ・各自の実習内容に基づき、「実習中に会った事例」を作成し、報告会を実施する。 ・各園の評価票を基にして個別に評価開示を行う。

3 平成27年度の実施概要

平成27年度の「教育実習Ⅱ」（幼稚園）は、前年度のやり方を若干変更して進めた。変更点とその趣旨については、別稿に記した通りである。ここでは、実施概要を記すことにする。

平成27年度の「教育実習Ⅱ」は、履修生53名（すべて初等教育学科幼児教育コース生）を第1グループ25名と第2グループ28名に分けて実施した。第1グループの実習は平成27年6月1～12日、第2グループの実習は6月15～26日に実施した。各園の実習生数は、2期合計して附属幼稚園では33名、協力園Aでは11名、協力園Bでは6名、協力園C（第2グループのみ）では3名であった。

実習前には事前学修会を2.5コマ分実施した。事前学修会では、まず平成27年2月（2年後期）に0.5コマ分を設定して、履修予定者に対して実習目標や評価規準、実習園概要、実習園決定の手続きなどを説明した。続いて春期期間中に、実習先の吟味や、「目標と課題」の作成、日誌の練習（教育実習Ⅶ日誌の改訂）などを履修予定者に対して課した。3年前期には事前学修会を2コマ分実施した。4月には、実習園・グループの決定や実習クラス・グループ代表の選定指示、実習費の説明、実習園に関する先輩への質問、グループでの「目標と課題」の吟味などを行った。5月には、実習園に事前訪問して説明を受けるとともに、学内で実習直前オリエンテーションを開き、実習中の心構えや諸注意、実習後の手続き・事後学修などについて説明した。4～5月には、学生が作成した「目標と課題」および日誌（教育実習Ⅶの日誌を活用）、保育指導案（実習園・クラスを想定した案）について、担当教員2名で個別指導を行った。実習期間中には、各園の担当教員が実習園を複数回訪問し、適宜、実習状況を聞き取ったり、実習生の様子を観察したり、直接指導を行ったりした。

事後学習は、前半・後半に分けて行った。前半は、履修生を6名の班に分け、学生がそれぞれ作成した「教育実習Ⅱで出会った事例」に沿って議論した。後半は、班が議論の結果を資料にまとめ、それぞれ10分間（発表5分・質疑応答5分）で全体に報告した。後半は、教育実習Ⅱ担当外の教員や次年度履修予定者になるべく参加できるように日程調整を行った。なお、後半の報告会資料はすべて電子データとし、iPadでそのつど確認する形を取った。このように、一斉に行う事後学習は、子ども理解や保育の可能性について、学生が自分の事例を用いて具体的に考察を深め、その成果を班・全体に共有する形で行った。このほかに、学生たちは教育実習記録の様式を用いて全体的なふり返しを行い、実習園・担当教員の指導を受けた。

4 成果と課題

運営上の成果と課題については別稿に記した通りである。ここでは、学生の学修に関して記す。事後学習後半（全体報告会）における各班の題目は、以下の通りである。

- 第1班「こだわりがある子どもへの援助」（3歳児3名との事例）
- 第2班「子どもそれぞれの心情に沿った関わり」（4歳児2名との事例）
- 第3班「気持ちを上手く伝えられない子どもに対する援助」（4歳児2名との事例）
- 第4班「子ども一人ひとりに応じた保育者の関わり方」（5歳児1名との事例）
- 第5班「子ども同士の関わり～友だち作りの場面～」（4歳児4名との事例）
- 第6班「子どもの気持ちを切り替える言葉かけ」（3歳児1名との事例）
- 第7班「子供の行動について」（3歳児1名との事例）
- 第8班「子どもの思いを受け止める保育者の援助」（3歳児1名との事例）
- 第9班「子ども同士のトラブルの対応」（5歳児3名との事例）

全体的に、実習中に会った子どもと自分（実習生）との関わりについて具体的に研究することができていた。ただし、瞬間の出来事の把握に止まりがちであり、事例に出てきた子どもの背景や前後の状況、クラスの方針などを踏まえて研究することが難しかった。そのことは学生たちもグループ討議や質疑応答を通して気づいており、この気づきを次の実習（保育実習・教育実習Ⅲ）に確実につなぐことが今後の課題である。